

福音のヒント 年間第3主日 (2023/1/22 マタイ 4章 12-23節)

教会暦と聖書の流れ

きょうの箇所はマタイ福音書の中の、いわゆる「宣教開始」の場面です。ヨルダン川で洗礼者ヨハネから洗礼を受け、荒れ野で悪魔の誘惑を退けたイエスが、いよいよご自分の活動を始めていきます。今年(A年)の年間主日のミサの中では、四旬節・復活節の長い中断(約3ヶ月)をはさんで11月まで、マタイ福音書をとおして、イエスの活動の歩みを思い起こしていくこととなります。

きょうの福音でマタイが引用しているイザヤ8章23節～9章1節は、実は「主の降誕・夜半のミサ」で読まれた箇所です。降誕節のテーマであった「闇に輝く光、神の栄光の現れ(エピファニア)」というテーマは、イエスの活動全体を貫くテーマでもあります。

福音のヒント

(1) 「ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた」(12節)。ヨハネが洗礼活動をしていたのはヨルダン川の下流、ユダヤに近い地方だと考えられています。洗礼者ヨハネが捕らえられて、イエスご自身も身の危険を感じたのでしょうか、ヨハネの活動の限界を感じたのでしょうか、イエスのご自分の故郷とも言えるガリラヤに戻ってきます。そして、これを契機にイエス独自の活動が始まることになりました。



「ガリラヤ」について。紀元前10世紀にイスラエルの王国は、エルサレムを中心とする南のユダ王国とサマリアを中心とする北のイスラエル王国に分裂しました。イザヤは紀元前8世紀、北王国がアッシリアに滅ぼされていった時代の、ユダ王国の預言者です。ガリラヤ地方はサマリアのさらに北にあります。イザヤの時代のユダヤ人から見れば、まさに「異邦人のガリラヤ」と呼ぶべき暗闇の地でした(なお、「ゼブルンとナフタリ」は、エジプトを脱出したイスラエルの民が約束の地に入ったとき、ガリラヤ地方を割り当てられた部族の名です)。イエスの時代のガリラヤ地方は、南のユダヤ人が入植して町を作っていたので、民族的にも宗教的にも南のユダヤ人と結びついていましたが、ユダヤの人々からは軽んじられていました(「ガリラヤから預言者は出ない」ヨハネ7章52節)。マタイはイエスがこのガリラヤで活動を始めたことを神の計画と見ています。復活したイエスが弟子たちに姿をあらわす場所もガリラヤの山です(マタイ28章16節)。見捨てられ、暗闇に覆われた場所、しかし、その中でこそ神の救いの計画が実現し、イエスと出会うことができる場所。わたしたちにとっても「ガリラヤ」と言える場所があるのでしょうか。

(2) 17節の「天の国」はマタイ福音書によく出てくる表現で「神の国」の言い換えです。マタイ福音書は洗礼者ヨハネとイエスのメッセージを「悔い改めよ、天の国は近づい

た」(3章2節参照)というまったく同じ言葉で紹介し、2人が唯一の神の同じ1つの計画の中にいることを示しているようです。この「近づいた」(完了形)には「近づいているけれどまだ来ていない」というニュアンスだけでなく、「近づいてもうここに来ている」というニュアンスがあります。2人の違いは、ヨハネが「天の国(=神の国)」の準備の時代の人であったのに対して、イエスが神の国の実現の時代の人だという点です(マタイ11章11節「およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である」参照)。わたしたちは「み国が来ますように」と祈りますが、イエスによって神の国は何らかの意味でもう始まっているのです。わたしたちにとって、すでに始まっている神の国とはどのようなものでしょうか。

(3) イエスが最初になさったことは弟子を作るということでした。これもマタイ福音書の結びと対応しているようです。復活したイエスの弟子たちへの命令の中心は「すべての民をわたしの弟子にきなさい…」(28章19節)というものでした。イエスの弟子を作るという活動がまさにイエスの活動の中心であったからこそ、同じことがイエスの復活後の弟子たちの活動の中心になるのだと言ったらよいでしょう。

「わたしについて来なさい」は「わたしの後に」という意味の言葉が使われています。一方「従う」と訳された「アコリュテオーakolytheo」というギリシア語は、ただ「後を歩む」だけでなく「同行する、仲間になる」という意味もあります。もちろん、それは司祭や修道者だけの問題ではありません。キリスト信者は皆、イエスに弟子として呼ばれた者なのです。わたしたち一人一人が弟子として呼ばれていることを感じられますか。イエスの弟子として歩むということはわたしたちにとってどういうことでしょうか。

(4) きょうの箇所は、イエスが突然誰かに声をかけ、呼ばれた人たちがすぐにすべてを捨ててついていく物語ですが、常識的に考えると少し不自然ではないでしょうか。イエスの弟子とは、イエスの言葉と行動に触れて、イエスに従うことを自分で決断した人たちだと考えるほうが自然でしょう。マタイ福音書がマルコ福音書から受け取った、この最初の弟子の物語はいささか理想化(あるいはパターン化)されていると言わざるをえません(ルカやヨハネは別の形でこの弟子たちとイエスとの出会いを伝えています。ルカ5章1-11節、ヨハネ1章35-42節参照)。普通の師弟関係なら、弟子のほうが「これぞ」と思う先生を見つけて弟子入りを願うものです。しかし福音書の中では、先生であるイエスのほうが弟子を選ぶということが目立っています。「イエスが弟子を選ぶ」ということは、神の選びの根拠は人間の側にはない、という聖書特有の考え方に基づいています。人間が神を選ぶのなら、人間の側の選択能力が優れているということにもなりますが、神が人間を選ぶというのは、選ばれた人間が優れているからではないのです。神の選びとは、もっとも弱く、貧しい人を選ぶことによって、すべての人を救おうとするものです。つまり選ばれた側は何も誇ることができないのです(Iコリント1章26-31節参照)。ペトロやヨハネも後々まで「無学な普通の人」(使徒言行録4章13節)と言われていました。

ここでは「すぐに」ということと「何もかも捨てて」ということが弟子の理想の姿として描かれています。自分自身のことを考えると戸惑いを感じるかもしれませんが、わたしたちの中にもそんな経験がまったくないとは言えないのではないのでしょうか。